

令和4年度第2次補正
探究的学習関連サービス等利活用促進事業費補助金

探究的な学び支援 補助金2023

効果報告レポート

【事業者名】

株式会社スコップ

【サービス名称】

スコップ・クリエイティブ・コース

【サービスの機能分類】

区分A-1 メインサービス

2024年1月

SCHOP Creative Course

[スコップ・クリエイティブ・コース]



「スコープ・クリエイティブ・コース」とは SCHOP Creative Course

スコープ・クリエイティブ・コース（以下SCC）のプログラムは、子どもたちが「絶対解」のない問いに対して、自分の頭で考え、クラスメイトと相談して考えながら、モノをつくったり、絵を描いたり、言葉にしたり、体で表現したりするなど、様々なアプローチで学んでいくことにより、失敗を恐れず、自ら答えを出す契機を与え続けていきます。

実社会で活躍しているプロフェッショナルと一緒に多種多様な学びの領域をテーマにしなが、探究を行う上で必要となる、「視点を変える」「思考表現の仕方」「相手に伝える力」などを楽しみながら「型」として習得していくことが可能なプログラムです。手を動かすワークと組み合わせて、デザイン思考やアート思考、プログラミング的思考などの学びを深めます。



スコープのプログラムは、映像を使った運用になるので、学年ごとに違うプログラムを導入頂くことができます。

例えば、小3は、国語の授業のコマに、《言語化への挑戦》を中心としたプログラムを編成。小5は、総合探求のコマに《アイデアと社会への発信》を主テーマにしたプログラムを編成といった感じで、コンテンツリストから、それぞれの課題や狙いに合わせてプログラムをピックアップ頂くことができます。



一方で、通常の授業のように学年ごとに行うのではなく、意図的に学年が混ざった縦割りチームで取り組むことも有効です。ひとつのプログラムで、学年の壁を乗り越えて、臆せず自分の考えを伝え合い、認め合う経験を積めるのもスコープのプログラムの特徴です。

「スコープ・クリエイティブ・コース (SCC)」の特徴

★プログラムの進行

ひとつのプログラムは、4回で完結するものが基本となります。4回を通じて、徐々にテーマへの理解を深め、子どものアウトプットを引き出すための構成を組んでいるのが特徴です。

まずは、自由にアイデアを出す。(発想は型にはめない。)

発想の型やメソッドはたくさんあるけれど、最初からそれに頼ると、型がないと考えられない人になってしまうかもしれません。

子どものクリエイティビティを型にはめず、自由に発想してもらうこと。発想の仕方から自分で見つけ出していくこと。

それを目指すためにプロナビゲーターからは、まずは知識や手法は教えて教えず、型に頼らないで考える力をみがきます。(困ったときのアイデアエーションの型も用意)

実社会とつながる、活きた学びを。

自分のアイデアは、実社会の課題とどうつながっているのか、つなげられるのか。

プロナビゲーターは、独自のテーマや知識とともに、実社会の課題を見据えた問いかけをします。

空想で終わらせることなく実現を考えるから、本気の「想像」になる。

この学びがあれば、将来、大人になって実社会に出た時だけでなく、現在の日々の勉強も、日常ももっと豊かなものになっていきます。

アイデアを実現するための型を学ぶ。

子どもは自分の発想を実現するための世の中の仕組みや、伝え方を知らない。

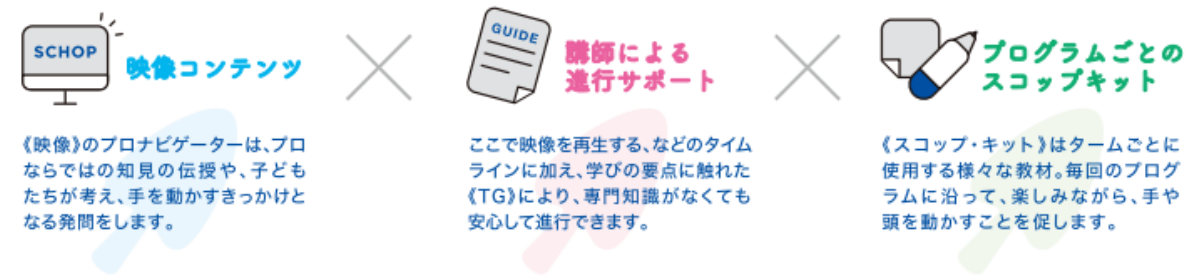
だから、発想を伝え、形にするために、できるだけ多くの型を知り、組み合わせ活用する。

その型を感覚的に覚え、身に付けるために、繰り返し、たくさん手を動かします。

課題発見整理の型	可視化の型	プロトタイプングの型
インサイトの型	言語化の型	答えを生み出す型

★運用形式

SCCのプログラムは、映像を使った運用になります。ただし、映像を見せておけばOKというものではなく、映像に登場するプロナビゲーター（映像の先生）による知識の伝達や発問と、現地の学校の先生がプログラムごとに用意されたキットを使用してワークを進める時間との役割分担で、授業を進行します。また、専門知識がなくても安心して授業ができるように、学びのポイントを示したTG（ティーチャーズガイド）をあらかじめ見て予習ができるようになっています。



【課題】

先生たちと探究学習の打ち合わせを行うと、常に課題として出てくるキーワードとして、「探究テーマをどうするか?」「授業進行方法をどのように統一していくか?」「資料や教材が作れない」「予習時間が取れない」「予算とコマ組みをどうするか?」がトップ5として挙げられることが多い。また、探究学習を進める上で課題として挙げられるのは、「視点が変わらず、並行した議論になってしまう」「大半が調べ学習になってしまう」「予定調和の探究になってしまう」「ネット記事やWikipediaに掲載されていることを疑わない」などの課題の相談を受けることが多々ある。

弊社の提供するSCCでは、探究を行う上で必要となる「探究の型」を楽しく学ぶことができるプログラムとなっており、先述した課題解決の一助となるプログラムである。

全てのプログラムにおいて、社会で活躍している、デザイナーやアーティスト、研究者、起業家などがプロナビゲーターとして動画で登場し、その領域のINPUTを行った後、探究する過程で必要となる、「想像と創造」「視点を変える」「思考の幅を広げる」「他者と対話をする」などの力を、実際に手を動かしながらOUTPUTを行うことで、自然と身につけることが可能になっている。

★探究学習の課題★

①探究テーマの設定

②授業進行の方法

③資料や教材の作成

④予習時間の不足

⑤予算とコマ組み

■ 探究的な学び支援補助金における活用場面

【学校の課題の解決】

学校が抱えている課題である、①探究テーマの設定、④予習時間は「複数の映像プログラム」を用意することで対応。②授業の進行は「TG（ティーチャーズガイド）」でサポート。③資料や教材の作成に対しては「映像とキット」でサポート。⑤予算とコマ組みは「学校ごとの特徴に合わせたコマ組みの相談」で対応し、解決の支援を行った。

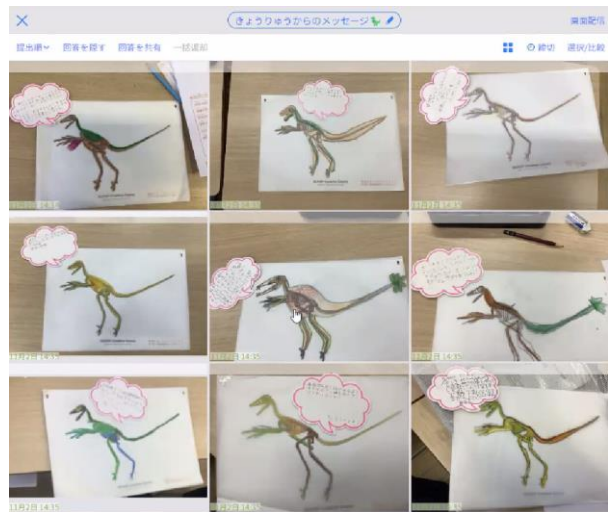
また、探究学習を進める上での課題となっている、子どもたちのマインドセットに関しては、教科指導のように「絶対解」があるのではなく、自分の視点を変えることで思考が広がり、他者との対話の中で「納得解」を見つけていくことを通して、間違っただけで怖がるのではなく、自分の頭で考え、答えを作り出すことで「探究の型」を作り、育むことができた。



【授業風景】 探究学習において必要となるINPUT領域は、動画を使用して授業を実施。動画はモニターやプロジェクターに投影して全体進行を行う。



【授業の流れ】 INPUT領域が終わると、先生がファシリテーションを行うことで、子ども達は能動的にOUTPUTを行うことができる。



【授業の様子】 ICTを活用し、子どもたちの製作物をシステムを利用して全員でシェアを行う。

【学校等教育機関】 7校

【学校等設置者】 7団体

【教職員の声】

- ★SCCは、子どもの創造性を高めるプログラムであり、問いの立て方や支援の仕方を学ぶ教員研修にもなる。
- ★普段の授業とはまた違う視点で授業づくりができるのは、多くの先生にとって学びになる部分大きい。
- ★探究活動において、視点を変えたり、思考を深めるということが大切ということが分かった。
- ★Society5.0に求められる、主体性や創造力、課題解決力などに対する学びのフックがたくさんあった。
もちろん、指導者側にも！
- ★授業が終了した後、次のスコープはいつやるのか？と子どもたちからの質問が多かった。
- ★予習が心配だったが、動画とTGがあるお陰で、時間が大幅に短縮できた。
- ★滅茶苦茶おもしろかった。子どもたちの発想を一緒に深めていく感覚は教科指導にも役立てられる。

【課題】

できるだけ先生たちの業務負担量を減少させるために、SCCの操作方法を動画化することで予習のタイミングを自分で決めることができるようにしたり、ファシリテーションのポイントをまとめたTG（ティーチャーズガイド）を用意したり、必要となる教具をキット化したことで、利用をした先生たちからの評価は非常に高かったが、答えが多様なケースのファシリテーションの仕方をレクチャーしてほしかったという声も2件ほどいただいた。

【改善策】

事前にオンラインで授業の運営レクチャーを行うような仕組みを作りたい。全員の先生に行くことは難しいと考えるので、先生のスタンスや特性に応じて対応ができるように、事前にレクチャーの希望選択制を取って、課題を解決していくことを検討。

■ サービスを活用した児童・生徒・教職員等のコメント感想等



中村 優希 先生
(宝仙小学校 教諭)

SCCの面白い点は、パッケージ化されたプログラムでありながら、実際に現場で授業を担当されている先生方が、ご自分の持ち味を授業の中に反映させながら、運用を工夫できるところだと思います。探究的な学び、本校でいうと「創造探究」の時間に何をやるか？ そのアイデアを出すのが、教員にとっては非常に大変です。0から1を創り出すには、時間も労力も大きく必要です。そんなときに、このSCCのカリキュラムを活用して授業を行うことはメリットがあると感じています。授業者として探究的な学びに関わる機会があることで、自らアイデアを考へ出すためのきっかけにもなると感じました。



小宮山 洋 先生
(成城学園初等学校 教諭)

そもそもSCCのプログラム自体が枠にはめようというものではありません。どうしても、一般的な授業は枠にはめて、その日行き着きたいゴールとか、そこに収めたいというものになってしまいますが、このプログラムは枠からはみ出ていいんだ、その先に進んでいいんだという姿勢を子どもたちに伝えられる授業だったと思います。あとは、子どもたちを叱らずに1時間の授業が進められる（笑）。授業のなかで、子どもたちのいいところをよりたくさん見つけられた気がします。



吉金 佳能 先生
(宝仙小学校 教諭)

探究的な学びの入口として最適かなと思っています。子どもの創造性を高めるプログラムとしてはもちろん、実践を複数の教員で進めることで、教員研修にもなると感じました。子どもの創造性や探究心を高めるためには、どのような問いをたて、どのような支援が必要か。体験を通して学ぶことができます。

また、既成のプログラムなので、同僚の先生たちと授業の内容について議論をしやすいのかなと思っています。同僚がつくったプログラムだと、どうしても言いにくいこともあります。SCCの場合はそうではないので、ストレートに議論することができます。

今回も互いに授業を見合い、また事後に振り返りを行う中で、これからの教育に必要なことを共に高めあいながら考えていくことができました。まさに実践的教員研修であったと感じます。



長田 柊香 先生
(成城学園初等学校 教諭)

私自身は、教科横断の学びが大事だと思います。音楽と国語とか、算数と社会とかを結びつけながら授業ができるといいなと思っています。ただ、教科をクロスオーバーさせて新しいものをつくるのは本当に難しいです。そのアイデアをもらえるのがSCCなんだと思いました。

お芝居のプログラムにしても、お芝居にとどまらず、生き方とか日常に広げていける学びがあると思うので、その点はいろいろな学校で活かせるかなと思います。プログラムもすごく丁寧につくられているので、授業もやりやすいです。動画のなかで授業を進めてくれるので、少し客観的に子どもたちを見ることもできました。



株式会社スコップ
東京都港区東新橋1-8-1 39階

【事業内容】

- ・「スコップ・スクール」の運営
- ・学習環境支援ツールの開発
- ・実践的創造力育成コンテンツの開発など

【資本金等】

3億5000万円

問合先：tankyu@schopschool.com